居行子

一

内務省圖書
第二
共

内閣文庫
和書
二五二〇一
一八九函
五冊
三架

和書門
二五二
一
九七函
五架
五冊

212
内閣文庫
和書
二五二〇一
一九〇函
五冊
一〇架

内閣文庫
番號 和 25201
冊數 5 (1)
函號 190 212

190-212

国立公文書館
National Archives of Japan

霜

居行子序

慈鎮和尚乃歌に。人さまざまの心なれども。
あはれなることは。きこえ侍るものにこそ。
人間常のなりぎ多くは皆癖ぞかし。人の生るや
其氣質を。天地にうけ数所をはぐくみ給ふ。
父母乃清濁によりて。其性の賢不肖厚薄を出
未だ好。其うまれつき乃性の。賢不肖強弱さ
もあるを。生れ出る少れは上貴人より。下土民に至る数

青藍文庫

まで。業の仕業を受て生れ出る事は。生出しとなれば草木の実を結ぶ。花を開陽雨露霜雪あり。生長する事ごとく。人も枝乃数を分て。貴人の子と生れ立ち。田舎人となり。土民乃子と生れ立者となり。民の子を業の上に業人の家に。貴人乃身のうへに生長し。皆業をうけの育成なり。世上唐文をんとなる

人多くの言語まねも漢語をたしなみ。俗事耳へ遠ざけるのみならず。俗事をいやしん。今日の事に疎し。浮世第一ものすきなく。文盲愚癡と育板と。道理をしらざる人多し。

佛神乃利生をせずん。あいまひまの人。孫宣山伏に計ること。前後のつゝまりにんとはあれ乃事あり。物と氣よりかゝるべし。のきやゝ好まいと人。ぞ見識をくよ。第一法に背くことなり。何ゆ

をうまし毎各此心をうけて癖すくものいなり況
愚がごとく儕癖なんをとる者よりもなほ甚しかるべしよ
あるべきと思へども。傳く潮顔回之好学なり。
舜何人ぞ。禹何人ぞと。故に作ずして事小也。
よりて之を失はんをもとむる。あるべからず。百里乃
歩行も一歩をもつて半とせざるべからずとぬきんでたり
あるべし。居行もまたかくのごとし。世人のまどいやすれば
まどもと学べき。雑をもつて居行を曰家

ごとく。任簡よりもまづ身を。何を示さんや只門前
乃庭のごとくにして学べば。足下の
ごとくなるべしと。愚曰老子の
所謂癖なるべし。門前乃老犬を
大中の功を積まんや。我ずして笑ふべく
ならん。何ぞ謙譲乃ならんと。強てもし
なんぞ是をあらん。居行五歩をすべて。
居ぞ癖のごとくにならんや見る人ぞ

癖を知らざるのみならずとなすべし。
其癖を其人の癖南部清兵衛

明和九壬辰歲仲呂

岡本隱龍川

居行子卷之一

目録

人相乃辨
天狗の辨
豔ふ少ふ
易學之辨
仙人乃辨

居行子卷之一

西村遠里述

人相の辨

人相をとる事衆人のよろこび信ずるところにて貴賤雅俗都べてよろこんで近世多くは行系にて郭西翁乃第子誰それ行人の門人某にて有しなどかくよ相學を唱る人多く儒先生にて相人の学ある人あり又自己よ神相全篇柳莊相法等の書ふよりて其学を修し往古將来の禍福をかくうらなへあり其くに信ずかそのの今日の生産の事毎日の吉凶を指て聽ゑ者よをのを尋問やよりて性情人あり之れの人の相家の大事の伊岩

ぞ〳〵人相の占和漢ともにまたたしかく甚起る事周眼許
屋よりでまると唐筆天綱うんどうとあり也相者の名あり玄
淳の世より望て呂公高祖を相し一老夫呂后孝惠公を
相し又相者幸賢を相し家朝廷も高麗の使法を
相せ〳〵数を以て相者のよき事すくれども皆うん今世人
の信じ相人のよろこぶ数よりわるし。真身一代の貴賤をわす
るゝ。相学に相そむ極うる。相学とせざる人も大抵はかるを
もつる今の世より家事の毎日を相者より憑。医者より療治を
ほどこすよりしたがうる事ひとし。故又相学を信せざる輩を
人い天地の気をうけ陰陽の妙合よりて生ずるものなれば形乃

醜猥なる人も有德なる人あり。形の美妍なる人も不德の人あり
さてうわていつ。霧も眼よ重瞳あり。堯の頂羽も又重瞳あり。
齊の晏子は其長五尺よりこゑれども命の賢相なり。其御者人
なるの男なり。此類代々の歴史より和漢にかゝる事相者乃
占不合のことを挙ることをそなる。後漢荀彧好書。素の
重卿予野の入る伝顧彦鳥の相わるしとゝ。信和好で抵尻
の男より事史なりしを。此名ることの相者なるしまさに
非相篇うどを著す。皆こと相者の占不合の事をそなる
なり。愚が行をふかくおもふ。相者の占百發百中して今日
乃時勢にその変ずるを知らず相学の

書をとりて。人い小天地なるものなれば。天文占に日月五星乃
七曜紫微天市の三垣二十八舎衆星をひく。皇帝三公
百司百官寢宮朝庭明堂倉廩府庫苑園田畠等。其
外諸物よ配當して。其星の事を以て。各其吉凶を占すかが
ごとく。人の面部よ表の文及び血色等をそなへて配当し。
其事を以て吉凶禍福を占ひ。たとへば眼を日月とし。左耳を
木星とし。右耳を金星。額上を火星。鼻を水星。鼻を土星
とし。又鼻を中岳とし。左右の頰骨を東岳西岳とし。額を
頤を南岳北岳とし。口を大海とす。掌文も又乾兌離震巽坎
艮坤の八卦の方位を建。父母妻子居宅家產乃屬を

配當し。眼鼻耳口眉を。五官と為す。天庭を初年とし。天庭
司空中正印堂と為し。流年を建。血色も紅色を吉とし
赤いわ〳〵。白を喪或い面とし。紫い玄黃黃色吉方の
色を以て。五行及び吉凶禍福を配して。
ひるものなれば。其人仇敵の功をなすべし。人うべ。邵子京房な
どの易相慎禪竜が天人文占のごとく。掌をさんだくうん
乃法ぜんよりしらべ考するものなれば。これを圖するも深うん玄芸
これを伝じて悟とするもあるべし。たとへば名よりさとり者うり
あるべし。主占を以て今日の產業をたらまし。君臣父子夫
婦兄弟朋友の間がくぺいろ〳〵のことをたくあらて。相者乃占の

年もうるまでのうり。強く毒をもせず人性をむけて気らくしの
のちよりわづかに人引よりあるらしの上のように個人わるく
人をわして来年の死すべしといへり。そを人今年のまぐ平常乃
ごく格別の疾ようく食事もあるよ食歩りも不自由うく
ほとんど居べ。傷よ来年の死を悟りて。そを身の傷を今年切
のやうにうべ。人に行れのやうにうしひ。そしてけんこうがらうるべ
べ。来年死すべしと聞くも吾身分のうちべき業のあるのよ
とうべでい。おくまきれとうる。又個人来年の立身出世わるく
分限富有よめべしといへども。傷よ今年より仕角を賞
生今の身分より去がまきれまとぷんくことわてどもうよ

おもうるまでのようしといつまきてもおくといまれても。今ようす
屋きうをおのよ人事とをうてうすもかうるかの個者
のつとうのうぐ分よこれのよ悟ひうの気悟より。今日の
時務よいをらしびうしの分ひとの学を悟ひ個人のよをきうぶ
しもなうれい法世のうしひ。人間一む事塞翁が馬。今年の
吉事来年の凶るうしうるべ人の福明日の福ようべきや
さうるべうぶ。若凶法傷いさそをきあ自己の命を今年の生死
知べうぶ。なぐく其気悟して。仏祖死期よのぞむ少も不覚
こうきうれやうよすべきい。人身の年をうる。地で天地乃
法をいまきぶ。孔よ入。乱をいまきぶ。法よ入。用乃盈虧乃

ぐ。盛衰禍福かるく仕たうれ。将来一すのさたもれ
ぬ。ぐ。如得正道をまもり。人事をつくしたるうえ。
天のうえ福いうくべきまうとたるもの。相者将来のさを
きて。伝の爲ときまうとたるもの。相者の合不合を徴い
をはうう。人相まよかをまず将来をきゝ。天文占墨色占
易占爲。いづれも爲をせんそうらくをうれば合と
わり不合もあり。十う十すぐわつめそ此もその道理う
無ぜめ。いくものう。数の仏これども異同わう。人相しつ墨色
い自己一身の占うまび事小し。天文の和漢ともに國
天下へ関しその事大よしてこゝ力占うい

をうらしらまず。相法い天文をこゝ人をうつづめたるやうな
のうう。易占い疑しへをぬうまび。天文人相去ぬと
いおたるぐかぐるうう。易学すの説の處に要ぐ。
今うよのせび。却て将来をとる占法ても。皆人意の
作為うまび。万おのううぐまりしようの爲をたとへ合
てうまび。拘泥すぐきまよわうぐるれ。教すにたるうぐる事
うう。法まぐも宇宙よ有ぐのれい。皆仏をとう悪く作をう
すてん。悪人わまびこて善人もわを国家盛れて忠臣わ
つそうたくもれのせぐれまうう。将来をかても
その爲う。相学いたをせんて上よるまび仕古将来去

に合をのこして給へて去り給ふ。

天狗の辨

世人皆いへ京師にも。愛宕鞍馬比叡いづれも天狗あり。山上ずりの身をきようせざれば。たゞちをうんと。まの大峯金剛高野白山羽黒多諸国の高山嶺いづれも天狗をいだくといへり。聞くの天狗をもつの名あり。或い次郎坊太郎坊僧正坊日輪坊えいづるの三郎霧太郎白峯太郎うんどゝ。源の義経の兵法い僧正坊に習ひて其形を三尺乃ぶすをとれば。頭巾篠懸を付。太刀を佩。小袴を着。鼻まるく髪ちゝ。今る山伏のかたちのごとし。皆人化をとこゝる事ゝ

ごとうすゝ物ごとも愚こゝをとゝへるよ。すまめまだるゝ。愛宕山の太郎坊鞍馬山の僧正坊うんどゝ。此方ゝ化をとこゝる女好とうんとゝ。女人の山とゝかましゝ。又叡山乃次郎坊い女好よ依怙贔屓のゝとゝて。よおの近所の八瀬小原おの栄好女い。女人禁制の山表を結く。嶺をく登りても行の結もう。外ゝ表ゝ入場照姫のゝる。ゝゝいとものでも。震動雷電登ゝがゝをとうを匂傾の雑劇ゝも。ゝゝ。女人を嫌い治郎にてもすゝ。天狗ありをいゝ山くゝゝ仏菩薩の地ゝよ。甚死者忌服をいゝ。ゝい男女乃淫ゝを忌。天狗いゝも陰陽のかゝよをゝ。ゝれもゝゝの一つ

うり名をの帰るるおの名。何國の雄ゞ子孫にて。いつの時代よ
天狗よりめぐりて。実録もうつ。そもそも漢土天竺ふよ今ゝ
天狗といふものいつ。八大龍王うんどのやうよ釋尊七千余巻り
中にも漏及ぐず。時珍ぐ李竹よ天狗と異名するものわ芸今ゝ
天狗のわるぐ。獾のごとく。韓退之ぐ汴州乱の詩よ天狗隕地声
如雷とあり。其注よ天狗形如犬又山海経よ天門山よ赤犬わり。
天狗と名ぐ。其実天ぐよとび。流て星と火。長さ数十丈声雷の
ごとくとこそ天官書ぐ大文志太平御覽三才図會管窺輯要
等ぐ所謂天狗星のまこと。日本ぐ人面鳥獸のことにわるず。巻よ
干寶搜神記よ南方越の地よ鳥わり。陰山よ獾で衡を穿て

巣を作り。口の大さ数ず。あを伐ぐの道てもを犯ぐ邪を焼ぐ
ものごとく其名を治鳥こそて。異日本の天狗よ似ることのごと
ものかこる處こ。世人天狗よ化ていろゝの奇妙をいへども。実
事よ出ることもなく。ものゝ怪ぐいひたること。天狗の
ことを書たるも又稀。日本紀三代実録ぐのごとき。淫擾と
すべき事もわるぐ。右手紀ぐの作ることゝろくせんとて。い
ろゝの作りまをつまりこれ。ようこそ事
実のやうでいこと。まこと自身よんてをうちのごとく。ひろこと
おもふるに。天狗ぐるものとすれども。今京師の町小路建ぐ亦
の上の所のこを。下の所にて。ものすること。実事大よ怪しすること

まことなり。ゆゑに世にあること。きつねと其身にわざわひをなすこと。
でい。きつねとあるものとて。さいはひ不思議のそうこんに化するものとぞ。
儒者達の大きまよかんけいく。太史公の記屈原ぢ書のこと
史記でさへ。実きまうこんあるとて多く。日本の和語ゆるとこの筆
者の作りたるものとて。荘子の寓言ひかのごとく。赤漆塗ぶ業花とも
ぐ。或い東鑑甲陽軍鑑等のやうに虚のことのにたること奇妙
なることなり。今世俗に浄瑠璃本の作者の趣向のごとく。
いろ〳〵其色あるごとくにたること人をして奇妙ぞうこんにたづかる
もこれなるべし。天狗の所作のわざとなる致すべきことのこのわざ。畢
竟海中に海小僧人魚等のわざなり。深山の魑魅のごとく似

たる獣あり。狀ごとまるべくして。陽気の凝聚ところより生ず
るものなり。陽気の所為なり。今其所を
ぶすに。山伏の姿に西いその住て山〳〵多くの修験僧り化
處うんぬ。そもそもよりたとへ上りて居るゆとうんぬ。曹を画
に其聲と出ることよりて。ひつさ連部と背負ふる鬼ガ
どもの鞭とを持ち居る處をぶするごとし。各ごとくも同じ。
山伏の縁よりて。各所坊次郎坊うんぬ。山伏ら一切名を
名乗りとなり。鞍馬山ガ僧正坊いかめ山。修験ガ名とて
ありのごとく化をなすなり。さて修験ガ名とて
いろ〳〵壹演傳正慈海乃法とぶ。たまひしことなるか

文徳帝が若といひうりさもるくして大切なる侍臣をいんの
御代より天狗よりの所さわりんこころをとうし。義経の兵法を
うしひとりてとも。張良が圯上の老人よりの書を授く。軍
法の奥義を極めしといふべい楠正成が天王寺の未来
記をとんの類なり。是皆衆人の帰依する所をとりの討策にて。
軍家よりうしく有事うり。義経つまご牛若丸なりしとも。
鞍馬山にて喜三郎といふる兵術者よりうしい得らもうり。
又濃州の金比羅山い崇徳院御憤の余りよ天狗よりるもを
らもうしいい。延喜の帝い菅原相を流罪さもれ岩より。
地獄よ陥りしとして日蔵上人地獄へ。帝より対面

の事とぶせるものあの数多分侍りし事なり。此間より信
濃国日本のあちこを天狗よりうして或の地獄へ行りて外の奇
妙といふ異物勝時のものいふるるいるよりたるもの。天狗なる
しいとも美泉のろい衆人にかりたをとより肉身の事なれも
憤もれれるといふもさるれども。日蔵乃徳をいとんそ地獄へ
ちし。金毘羅山を尊くせんとて天狗にうしたるものろう。
扨て高山後嶺い大海の汁をとりしこころ。平地
より甚さるれ。風雨寒暑燥湿乃天地の乱も平地と
いふかりなりて。たくがれ相根乃宿愛宮の坊ようど泊まる。
六月大暑の節なる夜陰よ火浮よ綿入乃ようもよと平化

乃至のごとくなるよ諸人のきるものなり。万事もこれよ意じて平地人居の格ようなるとき〻ばかりなれども平地よりして物すごくなれば天狗どの所為とうく平地よりして物すごくなれば天狗どの所為とたゞ事かりべきなれども事すべし。大峯山上新宮の有時坊〻修行のうち甚下行系わりてうつくしくあることをすべしよりたゞきさるべき人力にてすべきものにても高山の事乃事あり。深山うねびかりしの鬼あることゆゑいたるべし。海中よ諸魚のわるごとく。造化の鑪鞴にて出来る事うねびいたるものわるごとくなれども天狗といふ鬼あり。人よ害をうるよ事わたくしぶ世人乃

たるものよ佛神にうべてこれ有ものよわるべ。只鳥獸とりどりなれど就鷹鷲野猪狼狗のごときしるべ事とゝ。山伏のやうなる姿をして。穢不浄や或い罪の軽重乃吟味仮をして神罰を行ひ。ものうち教ありすよいわるべ。そしてさるべの事うれば。御公儀のもの法傳しもつべれども。の邪のかゝるべ。えい善悪のたゞしいかのやでいでるあ事にく天狗どの。細工にもうあるべ。天狗が女と嫉妬をうべ自身やうのうい姿へ。女の悪ゞ腹ゞ立くにくくにくくあるべ。鼻のきいとうるべ女中ゞ腹でもあり。うべてゞもべ。人家の仏人口ぶよ所為をとるべうにうん

さく法でいうて。きてくそんでやこさぞんでわらてを
行をつの。正法よきぶくうこ。よくくたをしてえ天狗乃
芸の業い行をして わくく人間のけがを不浄や。女乃罪のぞんを
やくすのぞ悔しをろえ 慈しゑ 蔵して志べ

やさと業

通行くるようしくして。神代のむく女神男神のみとの
まくだいしくしく夫婦の石をとるにも冠婚喪祭の大礼
にして。五輪の一つ天を陽ら。地を陰とわるら乃夫婦の
ゆよ万物のるをとつ。生くするい女畫蔵にくかぎを
う。その徳をうけて男とうろ女とうろ夫婦ゆくるだ

わてかりるまどのむつどのかとまう。一滴のわどとうとうけとん
やすいをでたく為をとをつけ。子孫の行をうあるようとを為よ
かさまよ。ひとよ弟よ。伯父よ。叔母よの名もかるれど。人倫の大事
にくくれどとのうぐさの第乃さるよかうあいれよ
だめ事ぞう。其大事のるとぷくとれ人のさどんかさるる人
やよ。ムナよ成くかいやしをのをうらく。二十よめて大事の
をつくを行までをまとお。ろてるやかるを目をめすをを
さまくとうとう。或くどれわしい忍び逃ま婦のうらを
のるくわるを塔こをいづれも為ぞう。ぷくく。休和尚の為を
いるその水上を尋れでとと伊行をとみたまいてどくく

いとかりしの法ぎまら少ところのわとりのさんとそんく
あとうるだうとさぐうとうとしかの半ちうし。衣裳乃えて
意ととうとうとかたちの色てよりかとうとあい意絡のすしぎとも
ゆうとうとれくの意みくく豊ようとうとね格しよりたうう
用ともの塩や鬻のかうゆうとさ風俗ようとうとれ笑ぐほうぐ
さとと。悠のわまんい鉛くの物好。琴吟ふりしもすさぐにて
行ぐかうらうし格ようとうとやうとまが縁乃わぐるぞそし。
あしいなくとれうう。あしたいんうとまのたくさ鳥はあう
うぐいろくよう意ぐくも。格をしのかうふんじんの原のうら
いとく有愛かぐじい。上下人より下廣人までもうら有よかうも

れく。其うゆし時の格をしいたくさいやうたも花とう美さ
も格ぐくうとぐも。疫ぐんたうう作の格ぐく格ぐかく
ぐべ。ぐくしうくしたぐうくんぐとうくを外題と
ぐぐ。格乃位のようのうちよう迷ぐくのすくまでもぐもうあ人よ
意ぐうくく大事のくく格をふ人ひとうるらぐなを色まぐと思。
をやうぐをうた世のたくうぐく自由よかうまぐもう格た
あ世の格さぐうくしい疫もあうあ薬ぐ法のうちも真実乃
意いかりをのうれぐ。其格をそうんぐのいとくかあしもうぐど
かくあ学の意うくまくたぐしよかうし美實よいのうとと
格くまを。地獄乃河法ともきをえ作くを絡ぐあうあい。

公の終年いやしく仕えて人ダ仕ぐかのをくれとそきこうし
よしで拙にくまもせめるの。可愛人のかゆをほうてうんどう
をとうばいとうやくに仕えるかるる。家身を賣てめうもと仕えて
此道のうるしかのうるし世よぜたりのでもうめまいまうしの者を
情。まもせめ命乃長短うべし。常乃女中もなぐ終乃
きうんも仕えとゆすぐさえわるまべまうの者ていいうしいもの。
ちいいうこうようこうこう。此わどうをまうんたまへ。虛うこう
うんしあらうぞ

易學乃辨

性著二ひいうだうようやめうん東武の人よ仕ぐ者をわいう人

易學に長ずるといふを以て東都京師より名をくれたる人射覆
乃ようとうこうこう一家の筮法を著す。朱子わいう海花易等ようすこ。
古易一家言うとうる書を著す。筮竹も別製ようこうこう卦家を
作る筮木名あるうて婚事の者これを尊び老若ようこう古易の金よ。
射覆會よりて易名こうこう或い古人の名を書ホい南附名笑
ある浮よ者藝者あるい戯子名るの名をまうて答よ仕えた人物
うう気出せいこうを筮こう。ふの人とさす。或い煙管寶玉等
硯名るの小器を答え名をまうんあれをさうしんたる易のこと終ろう
気卦面の表倒の卦象をとうう裏面の卦象をとうう
くまうをとうぞすこうにてもう文学よりたうう人いこれをもうれど

すもの多くはあるべし。但徒学の人、
くとわかりがたく、今時にいたりてはまことに誰もの
ぶんもうしぬべきよ世の中の学者、易をよくしること
よりする人もおのおの失あり。伝人、儀礼又は其外よりも
疾病婚姻名の吉凶をとくしめんことを望こと陰陽の理
にあずかるべきものなり。天地の道日月の運旋陰陽吉凶
の事を新人数と極めん事を初よりあるべし。易法の事よりて
吉凶悔吝の機をとくんや。易学多端なり。ただ子
夏の傳を初とし王弼が注、朱仲晦の啓蒙、徐紹禎の断易。
宋房の易傳、邵子の梅花易、程氏の傳、焦延寿の易林或は

左傳の易、其外管輅郭璞王瓚崔浩載洋毘以通呂東萊が巽名
易よりあるべし。家の学ととくて異同あり。古易の一変
も朱子の六爻変も邵子乃先天の易も。諸家の異説も吉凶悔
吝乃理を知嫌疑と定め決するより外なし。史記曰庖
犧氏有聖徳仰則観象於天俯則観法於地旁観鳥獸之文
与地之宜近取諸身遠取諸物始画八卦以通神明之徳以
類萬物之情造書契以代結縄之政神農氏遂
重八卦為六十四卦とあり。先天の方位已
定る。其時いまだ易よりの文字なし。文王後天の方位を定め彖辞
を繫周公爻を作り孔子象を制し繫辞の傳を述四聖人

のよを経くうるものにして。天地の道を彌綸す。繫辭傳曰
吉凶者失得之象也悔吝者憂虞之象也変化者進退之
象也剛柔者晝夜之象也六爻之動三極之道也是故
君子所居而安者易之序也所樂而玩者爻之辭也
是故君子居則觀其象而玩其辭動則觀其変而玩
其占是以自天祐之吉无不利彖者言於象者也
爻者言乎変者也吉凶者言乎其失得也悔吝者言
乎其小疵也无咎者善補過也是故列貴賤者存乎
位齊小大者存乎卦辨吉凶者存乎辭憂悔吝者存
乎介震无咎者存悔是故卦有大小辭有險易辭也

者各指其所之云云これらの意旨を述べてこれをもて進
退之なを知ると知ると所の行ると知ると知ると知ると知ると
小と知ると知ると事の成敗を知る。或云云と云云と云云と云云と云云と云云と云云と云云と云云と悔
蓋聖人と云云嫌疑と云云卜筮の書する所なり。
王世貞史記の評。伏羲の八卦を畫するは筮の為に設るよい
わゆる。後の聖人は易の數を合するを貞して筮を信じて吉凶を
すべしと云云これを卜筮に信ずるはわるしとつべし。編次の
篇はまことの言易に及び五十以學易可以無大過一共に七章
何晏皇侃王弼朱熹陳氏仁齊徂徠谷子等の諸儒其説
紛々たりと云云妙解なり。ゾウ先の書をして解を述べ

孤にして仁齊のいつるところ易は陰陽消長の象ときつちん進退存亡の理を明にす其教とするや貴賤を退し損し盈満を居しうるを忠恕なるこころをそなへ則ち大なるものうるをもつて王世貞仁齊の傷甚しかり程子王世貞の諸傷もさることいつくに教の書とするの弘なるのまつるを俗儒の時責トの者司馬季主のごとくにもあるべし宋忠賈誼の言の如く多く誇張をなして人情をはかり人の禄命をまるくして以て人の吉を説ひて福を禍と言て以て人の凶を傷て福を鬼神と言て以て人の財を乞しかるに孔子の謝を求て已に私する者の言の如く世に易をとなへいつくの巫祝ならびに聖人乃

書名を汚す何事の財産の貴のごとき外象を以て甚変断を切を積の切磋琢磨の為うるべきも四聖乃ち以て戒をなすを玩ぶ嗚呼これ愚ゲ雲山虚うるたやすし浮誉の名あり易者たりしもの孔謝と貪る責トの後うんで殊らんや世の人い巧詐を逞く虚名を餌り空利を逐く愚人を誘惑して財あるを人に出る僧ず仏の識わつくる鬼神巫祝乃理を通ずんや世俗皆黄色人相筮法ぞなる相ひどき類うると思くるべ大うるまるべ人相乃術を奉しく述たまひ人人を辨ぜんとす黄色人相の其身の時未とうるい ちうてこまをおかるるべ易い疑を鬼神に問ぶしやすく

国立公文書館
National Archives of Japan

易學を學ぶ人は仕途を傷せず謝を求めて占を
うらなふに五十歩百歩のそのかたきを司馬季主ごとくに
わるびれ愚がましく所の其事の可否を鬼神に問ふ
ことは日夜に勤て信心堅固にして其身齋潔戒慎恐懼
して疑ふ事なかるべし。朱子の筮法も古易の法にも係の占法
て。假如蔡氏の儀範は八十一の占法にもづきたれども拘
泥せず。信ずべき量を計りて鬼神ことを祈んやいかんや
易の占法をも青銅十二錢の礼を惜。貴ドにあらずと雖も
亦礼物を貪るのこころ。主人も筮者も鬼神をうるおすべし。
各自のまごころをもつて行とす。況て鬼神うんぬん

ことを告んや。如此乃事うれひ世上をよへしとつまらぬ
聖人の易の形よりも巫祝山伏の法世をうるおすごとくなるべき
うり。まことの易學をまもるべし。天を樂しむ。子曰夫
易開物成務冒天下之道如斯而已者也是故聖人以
通天下之志以定天下之業以斷天下之疑

仙人の說

天狗の類よりもいむつかしきものなり。日本にいにしへ
より天狗にみおそれ畏るる。漢土にも仙人といふものを
尊びたふとびたまふ。日本にも天の仙人といふことも有。
列仙傳といふ書もあり。都乃天狗もこれまりなるべし。

唐の仙人も不死なるをもうす。天人原発微は西山の真氏は神仙の
説を齊の威王燕の昭王のころより始る。秦の始皇漢の武帝は
至て嗜う。皆方士のうたと所うと秦の始皇帝長生のあるさ
のあらに徐福といふ方士に命じて童男童女五百人を
遣て不死の薬を求もとめしむ。徐福
仕て日本に渡る。紀州熊野浦に着船し宝乗を行
つ。今に熊野に徐福の宮とあり。西漢の武帝又仙術
を好て殿宮楼閣を造り露盤を立たるさまざまの事を信
用あり史仙術をなる方士かるく出て。いろいろ仙を
せんぎ求しいとぐ。その身は崩御ならぬ崩御ならぬ。

後に神仙の事を奇妙にして。仙家の書とつくるの出来たる。
劉向葛洪が輩抱朴子神仙傳等の書をつくる。黄帝老子を
祖とし黄老の術を学ぶべきまつり。黄老と云
法とも孔子の教へとはちがへど。仙術の祖とすられたりがある。
まつり黄帝は上古の事うたがさをきめ。老子は長命
なるといへども終る所をきらひ。仙人乃元祖
うつりて事もなし。修よかまに命の老子よりそれがそつて
いまあるまでも言がらて。仙をそれ人間なる浸擾もうし取
にあるを老子の学は其意を熟得すれば世上の傷者乃ちく
かるやうなるものでの形く。基そるべきなるて仙人乃祖人うつを

いいわやしむ所をきまうう。仙のまま六経よりでて。列仙傳にそなはる。
そもそもよ得ての術を書の名或は風より御し。雲を翔り或は巷より
乘り鶴に駕し。又は經より系級より出るなど。さまざまの事あり
ども。後あらてこそよこそるわもうし。又は正史こそ孫にもの名ば。
望向葛洪が後。こそ名ばかりうこそ。命をこめれば後ひてんこそ
ぐらうこと。後をどもくぐらうこと人命をこめれば後ひてんこそ
後擾もうこ。周の穆王乃四童世よ高。鄰徐山に後
穆王のさづけられ。釋迦乃四句の文のたうみにて七百歳を
經こと三國のま。魏の文帝の時名を彭祖とかへて出るあり世
いる類。何とたうる。後擾こそて四童の長こたるもの

うことする。愚い信じかこうまこそよ信ぜず書るれにあらよ世を
やしんにく。和漢世もに歴くの書籍虚にけるう。夫人こそ上
壽百年前ほうる者。和漢ともに元二千有餘年大抵ば紙
うう漢去にくも上古の人者一萬歳。あるい歳百年など
いこうこそ細こそあるこ。こそまこ正史に載ることの人
きこそい後よどう落こく。百年家おほうまこ後ほうかこそ
まこそうまこ。地こて第四始あるこ生あれば死
あり。不可思議乃天地にこく邵康節其名を紀て。天地の
始終十二萬九千六百年一元の數こまこ。いこんや人書る。
仙人よぬにかせこも一度い死こそまこうこにくにたるこ

に死で去るを待て、ゆんれば。彭祖が七百歳も七夜の内に死ぬ。赤子も月まつれば死ぬ。されよりまた強てこそ。拙長年のうれひとなりて、仏でうれぬ。俗世の若ものこそ、こしてこそ長生きする者もうし。古人いつてゆく人安うれば、ながを楽む。痛び死をなげくを、ゆるん給つ。かくまで衆人のなげく命うまでも、わまられ強後かうて、ながらへ死てしこいて長病乃人なく、美をめくさまで、養生してもて病若やまざれば、凡人なげくも死なを惜よれとのうち。貴人いとうん平人とても財宝乃くさんを持。仏手ゆのまよまうる人の死を惜とれたまをうる。貧者よせまう行くの強後することの仏も去る人も

名を惜よれ人多し。浮世の財宝をいやうるを歎なをいくく去るいくくも此世よ名の残るめやまうる。如此の世界の力なるまでは長生きすれば、ひのもせてかく面白ようまてれのとを死なるのはるるをうるがきこのうれたの二ついてのまよあるずやいうどいやどくくも一度は強よのがれ。あとく仙人でも終まれ死孫びをてこ千歳乃又は七百年のとをれくよ長生の孫うちはかくわう。其上人界のたれくよいてものは。男女乃淫楽仙人を色を見ひしわうを。心のまに欲情を動し酒宴乃真をと催し。口よ美肉を喰ひ。鼻よ味を求し服よ華美乃飾をとん。耳よ琴こ味線なるの音をきて。或は袖糸白拍子浄うう

音曲又い茶香蹋蘭のゆゑ。或い衣服家宅の結構。まことその身の立身に狂威をうるの類。人情大略相同じ〳〵人〳〵乃仙人をうらやみ。仙人の長生するやうをうらやみ。喜怒哀楽愛悪欲の七情を離れ。穀食を辟。身い木の葉をまとい霞を飲し。気を養深山幽谷より住て。ちまたに居る人情の如く一切にしてすべてまことの道を修得の人。裸身にして衣をまとわず。木の葉を着く。風に御し雲に翔り行用がみて。どこへ行のか人情を離れ身に行を示すやうにするやと。たゞ鳥に乗り鶴に乗り身上にして陽居して。生てかるうらの人情に同じ〳〵孫べ。拙木

死にはのごとくしてそれいれぬとの更。年齢相多よりまり行うゞ或い碁将棋茶香のこと。行うゞもせべ一日もたくしてはず。仙人人情をとるまえのたれを行やうのまれや愚かにして老衰して人よりまえ生たるうるのまれよ。人倫をとれまて深山幽谷室中を翔りわれ。中をとぶことを思ひ乃うい軽業師のやうにして面白きまれをうるたりうるに。何が楽うまよりあるんとたるうるさやうに不自由をめして数百年も生のびなんぞ。せのごとくして住とかまとい。とたるゞやうゞ五十余年の齢うまべ仙人うるそれ小四国のまうれども。次第に衰弱もそづくしまぶ乎とすれとたるふに。仙人よ酒もものまんば芝居

もやうず。蕎麦もくらず。女乃そぐへもよのくしば。奥島野菜乃
膳もすいくしぼ平をあだだり雲くしすまるだうもを。
たれくしにくく。五百年もせくくしいそで。拾角乃猛
俄さらくしちれを年そう。千年せそも迷も縁よい死
ぬる身うくしび。命をたよまもせ人男の若玉を人ゑまたして。
よいかぐんよ縁くとそげ。わとかくせうくしくと入らうしくわと
れを乾坤まるて。生死の末戸をぬて。常根後命世路を
体せを。天地の至楽たくんう。そまわもに仙人乃住とにそも
うくしかくまず長生が志くひとはそ人いを百かくせ元の後面や。
酒爽関ちうとそうくしとやちんうけて。稽古ちうへくし。世乃おくの

俗情の者いさやうの事ちくしぼ。男のくしくの
家くする給仕人くよりぐうれ女の給仕の食をのもうます。次
酒より諸白いうまくしいくしくしくるまそぐいやの仙人
にくくそ乃うる生

居行子巻之一終

玉屋物觀之殺

国立公文書館
National Archives of Japan